

氏 名	時田 紗緒里
学 位 の 種 類	博士（文学）
学位記の番号	甲第229号
学位授与年月日	2020（令和2）年9月20日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
学位論文題目	荒木田麗女論考
論文審査委員	主査 福田安典 （日本文学専攻 教授） 副査 石井倫子 （日本文学専攻 教授） 古川元也 （史学専攻 教授） 岡本聡 （中部大学 教授） 宮本祐規子 （国文学研究資料館 特任准教授）

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

### 【本論文の構成】

本学位請求論文は、以下の通りに構成される。

#### 序論

#### 第一部 麗女の歴史物語

第一章 『月の行方』における「月」—和歌を中心に—

第二章 『池の藻屑』の人物造型—足利将軍家を中心に—

第三章 漢学者の歴史物語観—『池の藻屑』と『月の行方』に寄せる序跋から—

#### 第二部 麗女の擬古物語

第一章 『藤の岩屋』と『野中の清水』の成立をめぐる問題

第二章 『藤の岩屋』と『野中の清水』の構想と擬古物生成方法

#### 第三部 麗女と宣長の論争

第一章 『野中の清水』をめぐる論争の全体像

—『本居宣長慶徳麗女難陳 並氏栄正身岩城評』を手掛かりとして—

第二章 『野中の清水』論争考—擬古物語の方法の違いに着目して—

#### 第四部 麗女と漢学者

第一章 野村東皐の思想と麗女との交友

第二章 麗女と頼春水—『初午の日記』春水序文を通して—

#### 結論

### 【論文要旨】

荒木田麗女〈享保17年～文化3年(1732～1806)〉は、伊勢神宮内宮権禰宜の娘として生まれ、後に伊勢神宮外宮御師である叔父荒木田武遇の養女となった。武遇に子がなかったために、慶徳家雅を婿として荒木田家を継いだ。

麗女は連歌の第一人者として豊宮崎文庫月次連歌会の指導を担いながら、歴史物語、擬古物語、日記、紀行、随想、和歌、連歌、俳句、漢詩等多岐に渡る作品を残し、その数は約100種400巻にも及んだ。

麗女著の擬古物語『野中の清水』に宣長が無断で添削を施して麗女に送ったことをきっかけとする論争でその名が知られている。両者は絶交して終わったのだが、真淵門の村田春海に師事した国学者清水浜臣はこの論争に関わって、麗女を「いと思ひあがれる本性」で「人のいさめにしたがふことをなさ」ないとの評価を下した。浜臣の評に影響され、国学の大家宣長に従わない身の程知らずの女という見方が多く為されてきた。

しかし、この浜臣の批評は、浜臣が麗女の和文創作や和学研究が自分達国学と同じ思想の下為されたものと認識したが故のものであり、むしろ批評に値するだけの注目度及び実力があつたことを認めるべきではないか。

麗女の漢学者としての側面が重要視されてこなかったのは、国学の大家宣長の存在が大きく影響したと考えられる。今まで注目されてこなかった麗女の漢学者としての側面に焦点を当て、麗女の和学について、「漢学者の和学」あるいは「漢学の素養を持つ者による和学」という視点から考察し、麗女作品と評価の再考を試みる。

第一部では、麗女の歴史物語『月の行方』と『池の藻屑』を対象とした。

麗女の歴史物語は、史実と認定し得る漢文史料や記録及び既存の歴史書や歴史・当該時代を知ることのできる物語類などをもとに、新たな物語を生成する営みとしての評価をするべきとの問題意識の下、考察を行った。また、『月の行方』と『池の藻屑』には漢学者の序跋が付されているため、史実に文学性を付与して物語化したものである歴史物語について、同時代の漢学者の目に麗女と麗女の和文、特に歴史物語がどう評価されたのかも検討した。

第一章『『月の行方』における「月」—和歌を中心に—』では『月の行方』について、和歌に注目して文学性を論じた。特に『建礼門院右京大夫集』を多用していることを指摘し、「月」の語が建礼門院を象徴する語として使用していることを、『月の行方』における建礼門院右京大夫の和歌利用から明らかにした。建礼門院の物語の中で作られる高倉天皇像は、漢文史料から得られる史実に和歌集や物語集の要素を加えて造型され、武力を忌避して雅を尊ぶ高倉天皇像として構成されていたと論じた。

第二章『『池の藻屑』の人物造型—足利将軍家を中心に—』は、先行研究によって指摘されてきた「武人の平安朝化」についての考察を中心に検討した。特に、足利将軍家の尊氏、義詮、義満に着目して、尊氏から義満まで、段階を追って武力に加えて文事にも精通するようになり、公家として権力を得るように造型されていた。従来先行研究で『池の藻屑』は「武人の平安朝化」が為されているとの論考とは異なっていることを明らかにした。武家中心に描かれる『太平記』等軍記物を中心に典拠としながらいかに宮中の中枢にいる足利将軍家及び武家を描くかが『池の藻屑』における主題であることを示した。

第三章「漢学者の歴史物語観—『池の藻屑』と『月の行方』に寄せる序跋から—」では、北海『池の藻屑』序文と竜溪跋文、東皐『月の行方』序文を通して、漢学者の歴史物語観を明らかにした。

北海は「正史」を「実」、「野史小説」を「虚」と定義し、『池の藻屑』を「野史小説」と定義した。東皐は、「国史」「稗官小説」「野史」の3つに分類し、『月の行方』は「稗官小説」とであると定めた。そして、北海は「野史小説」の架空性・文学性に注目して評価、東皐は歴史を学ぶ助けになるものもあるとして架空の文学「稗官小説」を評価した。北海と東皐とは共に歴史物語の架空性、つまり文学性を評価していた。漢文では達成し得ない和文の歴史伝達を認める態度が漢学者の北海と東皐に見られたことは、麗女の和学の営みを漢学と両立するものと見てよいと結論づけた。

第二部は「麗女の擬古物語」と題して、唐代伝奇小説に着想を得た麗女の擬古物語『藤の岩屋』と『野中の清水』を論じた。

第一章『『藤の岩屋』と『野中の清水』の成立をめぐる問題』では、『野中の清水』跋文の検討を中心として擬古物語の方法を論じた。麗女は擬古物語について、虚構性と真実味という一見矛盾して見える2つの要素があることが面白さにつながる要素と考えていた。現実にはない世界を描くが、当該時代に即した物語を利用することで、本当にあったかのように読者に思わせることが麗女の目指す擬古物語であったと推定した。

また、宣長『野中の清水添削』の『野中の清水』跋文解釈を検討し、宣長が「桃源」という作品名が『野中の清水』に出てきたときに、実は『藤の岩屋』の別号であったところを『野中の清水』の別号と解釈するという誤読をしていた。それにより、跋文の主旨が理解できなかったのみならず、『藤の岩屋』と『野中の清水』が一続きの物語として読まれるものという前提を把握していなかった。特に、『野中の清水』における『遊仙窟』の影響を見るには『藤の岩屋』を介して検討されるべきであるところを『野中の清水』単体で論じてしまったために、宣長は麗女の意図を読み取れなかった。宣長が『野中の清水』が漢文調めいた文章だと添削・批判した原因のひとつであろうとした。

第二章『『藤の岩屋』と『野中の清水』の構成—『遊仙窟』と『源氏物語』利用—』では、第二部第一章で得られた擬古物語の方法をもとに、具体的に『藤の岩屋』と『野中の清水』を『遊仙窟』から擬古物語へ変換する要素について検討した。麗女は『遊仙窟』の筋をほとんど残しながら、『源氏物語』や『伊勢物語』の登場人物と、一般によく知られる日本の歴史上の人物を想起させるように人物を造形し、『藤の岩屋』として成立させた。『野中の清水』は『藤の岩屋』とは逆に大枠のみ『遊仙窟』を借り、王朝物語の世界を多く取り込むことで新しい物語として造型した。『野中の清水』は一見『遊仙窟』の影響が少ないように見えるが、『藤の岩屋』を介在させることで、『遊仙窟』から『野中の清水』まで、漢文作品の和文化・擬古物語化という目的意識を持った一連の作品として把握できることを述べた。

第三部「麗女と宣長の論」は、論争の経緯や内容が分かる資料を整理して、論争の全体像を概観した上で、麗女と宣長との『野中の清水』をめぐる論争の再考をおこなった。

第一章『『野中の清水』をめぐる論争の全体像—『本居宣長慶徳麗女難陳 並氏栄正身岩城評』を手掛かりとして—』では、まず論争の経緯を整理し、次に宣長に対する麗女の反論『麗女難陳』から、麗女の主張の論点3つを指摘した。1つは宣長が『野中の清水』を

添削したこと自体への不快感、2つ目は麗女の反論を受け入れる気がないという不信感、3つ目は擬古物語において漢文調の文をよしとするか否かの学問感の相違である。宣長は添削を助言のつもりで行い、麗女とは学問的交友を持ちたいと考え、議論をきっかけにすることを目論んでいただろうことが察せられ、麗女は根拠なく誹謗中傷されていると感じており、感情に行き違いがあったことが判明した。

第二章『『野中の清水』論争考—擬古物語の方法の違いに着目して—』は、宣長の擬古物語『手枕』を通して、宣長が『源氏物語』を範として擬古物語を執筆していることと、『源氏物語』に近づける方針で『手枕』の修訂を為していることが看取された。宣長『野中の清水添削』にも、宣長が麗女に『源氏物語』を模範として修正するよう指示する箇所が複数見られた。一方で、『麗女難陳』には、麗女が『源氏物語』を根拠として宣長に反論するも受け入れられなかったことに憤っている箇所が散見された。改めて論争の原因を考えると、宣長は自分が理想とする『源氏物語』本文に麗女の擬古物語文を近づけようとし、麗女は擬古物語に『源氏物語』を利用しても、想起させる程度に留めていたことがあり、両者の『源氏物語』利用への考え方の違いに論争の根本的な原因があったのではないかと論じた。また、宣長の想定する理想的『源氏物語』本文の基準が麗女に明確に示されなかったことにも原因があると思われる。

第四部「麗女と漢学者」においては、麗女と交友を持った漢学者野村東皐と、頼春水について考察をした。

第一章「野村東皐の思想と麗女との交友」では、今まで整理されてこなかった東皐の事跡を追って、特に『読国意考』の検討から東皐の和学への態度を解明した。東皐は、真淵が漢学を排除する態度を取っていることを批判している一方で、他の思想を介さず日本の古典をそのまま理解すべきという真淵の思想と真淵自身の実力を認めていた。『読国意考』は先行研究で護園学の立場から国学を裁く論とされてきたが、それは誤りである。また、『月の行方』序文と麗女『慶徳麗女遺稿』・『初午の日記』とを検討して、東皐は漢学者であるが和学に関心を持ち、麗女に漢学と和学の両立の可能性を探っていたのではないかと結論づけた。

第二章「麗女と頼春水—『初午の日記』春水序文を通して—」では、麗女の紀行文『初午の日記』に寄せた頼春水の序文の検討を行った。序文には、麗女及び『初午の日記』への賛辞と、家雅と春水が書簡をやり取りして序文執筆に至ったという経緯、春水が決行した吉野への旅について書かれていた。この春水の旅は、春水の随筆『在津紀事』にもほぼ一致する記事があり、『初午の日記』春水序文と比較することで、麗女が春水に序文を依頼した時期を安永7年3月末以降同年内であることを示した。麗女は春水と交流するために序文を依頼したものと思われるが、序文執筆以降、両者の交流が見られる史料が現在確認出来ない。これ以後交流を持たなかったとすると、春水がまもなく大阪から広島へと移ったことで、交流が途絶えたものと思われる。

以上を総合して、以下の結論を導き出した。近世和文の中で麗女を位置づけると、『源氏物語』以後連綿と続く女流文学の系譜に麗女を並べる見方、もう1つ、近世和文を雅俗の対立軸でみた場合の「雅」に属し、その中で真淵門、宣長門のどちらにも属さない第3派に位置するとの見方ができる。そのどちらも麗女研究には必要だが、どちらの立場からでも麗女が研究されることはなかった。その2つの視点をつなげるには、「和学に精通した漢学

者」あるいは「漢学に精通した和学者」として麗女を位置づける必要がある。漢学の素養を以て和文を為す女性は、『源氏物語』作者紫式部を代表として多く存在していると思われ、国学の影響下でない儒学者の和文に麗女の和文を並べ、麗女を「漢学をよくする者の和文」として見ることも可能であろうと思われる。

## 論文審査結果の要旨

### 論文の概要

#### 【本論文の構成】

本学位請求論文は、以下の通りに構成される。

#### 序論

##### 第一部 麗女の歴史物語

第一章 『月の行方』における「月」—和歌を中心に—

第二章 『池の藻屑』の人物造型—足利将軍家を中心に—

第三章 漢学者の歴史物語観—『池の藻屑』と『月の行方』に寄せる序跋から—

##### 第二部 麗女の擬古物語

第一章 『藤の岩屋』と『野中の清水』の成立をめぐる問題

第二章 『藤の岩屋』と『野中の清水』の構想と擬古物生成方法

##### 第三部 麗女と宣長の論争

第一章 『野中の清水』をめぐる論争の全体像

—『本居宣長慶徳麗女難陳 並氏栄正身岩城評』を手掛かりとして—

第二章 『野中の清水』論争考—擬古物語の方法の違いに着目して—

##### 第四部 麗女と漢学者

第一章 野村東皐の思想と麗女との交友

第二章 麗女と頼春水—『初午の日記』春水序文を通して—

#### 結論

#### 【論文要旨】

荒木田麗女は、伊勢神宮内宮権禰宜の娘として生まれ、後に伊勢神宮外宮御師である叔父荒木田武遇の養女となった。武遇に子がなかったために、慶徳家雅を婿として荒木田家を継いだ。

麗女は連歌の第一人者として豊宮崎文庫月次連歌会の指導を担いながら、歴史物語、擬古物語、日記、紀行、随想、和歌、連歌、俳句、漢詩等多岐に渡る作品を残し、その数は約百種四百巻にも及んだ。

特に『野中の清水』をめぐる本居宣長との論争が有名であるため、国学の大家宣長従わない身の程知らずの女という見方が多くなされてきた。

従来のかかる批評、すなわち国学者の範疇に麗女を無理に嵌入し、矮小化する、もしくは近世期には珍しい女流作家であることを高揚する姿勢について、反論を試み、新たな知見を提示したのが本論文である。

論者は、従来の枠組みでは見落とされてきた漢学者としての側面が重要視されてこなかったのは、国学の大家宣長の存在が大きく影響したと考えられる。今まで注目されてこなかった麗女の漢学者としての側面に焦点を当て、麗女の和学について、「漢学者の和学」あるいは「漢学の素養を持つ者による和学」という視点から考察し、麗女作品と評価の再考を試みたものである。

第一部では、麗女の歴史物語『月の行方』と『池の藻屑』を対象とし、史実と認定し得る漢文史料や記録及び既存の歴史書や歴史・当該時代を知ることのできる物語類などをもとに、漢学者の序跋を分析しながら、史実に文学性を付与して物語化した歴史物語について検討した。

第一章では『月の行方』について、和歌に注目して文学性を論じた。特に『建礼門院右京大夫集』を多用していることを指摘し、「月」の語が建礼門院を象徴する語として使用していることを、『月の行方』における建礼門院右京大夫の和歌利用から明らかにした。本作における高倉天皇像は、漢文史料に和歌集や物語集の要素を加えて造型され、武力を忌避して雅を尊ぶ天皇像として構成されていたことを論じている。

第二章では、先行研究によって指摘されてきた「武人の平安朝化」について考察している。特に、足利將軍家の尊氏、義詮、義満に着目して、尊氏から義満まで、段階を追って武力に加えて文事にも精通するようになり、公家として権力を得る構図から、先行研究の「武人の平安朝化」に疑義を提示し、武家中心に描かれる『太平記』等軍記物におもに拠りながら宮中の中枢たる將軍家及び武家を描くことが『池の藻屑』における主題であることを示している。

第三章では、江村北海『池の藻屑』序文と竜溪跋文、野村東皐『月の行方』序文を通して、漢学者の歴史物語観を明らかにした。

北海は「正史」を「実」、「野史小説」を「虚」と定義し、『池の藻屑』を「野史小説」と定義した。東皐は、「国史」「稗官小説」「野史」の三つに分類し、『月の行方』は「稗官小説」とであると定めた。そして、北海は「野史小説」の架空性・文学性に注目して評価、東皐は歴史を学ぶ助けになるものもあるとして架空の文学「稗官小説」を評価した。北海と東皐とは共に歴史物語の架空性、つまり文学性を評価していたのである。そのことにより論者は、漢文では達成し得ない和文の歴史伝達を認める態度が漢学者に見られたことは、麗女の和学の営みを漢学と両立するものと見てよいと結論づけている。

第二部は「麗女の擬古物語」と題して、唐代伝奇小説に着想を得た麗女の擬古物語『藤の岩屋』と『野中の清水』を論じている。

第一章では、『野中の清水』跋文の検討を中心として擬古物語の方法を論じた。麗女は擬古物語について、虚構性と真実味という一見矛盾して見える二つの要素があるとして、虚構を描きながら当該時代に即した物語を利用することでリアリティを持たせることに麗女が目指した擬古物語を捉えている。

また、宣長の解釈についてその誤読および誤読に及ぶ状況を指摘し、本来は連作であった『藤の岩屋』と『野中の清水』が中国古典を介した一続きの物語に至らなかったことを論じている。

それを承けて、第二章では、具体的に『藤の岩屋』と『野中の清水』を『遊仙窟』から擬古物語へ変換する要素について検討し、『遊仙窟』の筋をほとんど残しながら、『源氏物語』や『伊勢物語』の登場人物と、一般によく知られる日本の歴史上の人物を想起させるように人物を造形した麗女の手法を明らかにしている。『野中の清水』は一見『遊仙窟』の影響が少ないように見えるが、『藤の岩屋』を介在させることで、『遊仙窟』から『野中の清水』まで、漢文作品の和文化・擬古物語化という目的意識を持った一連の作品として把握できるとしている。

第三部「麗女と宣長の論」は、論争の経緯や内容が分かる資料を整理し、論争の全体像を概観した上で、麗女と宣長との『野中の清水』をめぐる論争の再考を求めている。

第一章では、論争の経緯を整理し、次に宣長に対する麗女の反論『麗女難陳』から、麗女の主張の論点三つを指摘した。一つは宣長が添削したこと自体への不快感、二つ目は麗女の反論を受け入れる気がないという不信感、三つ目は擬古物語において漢文調の文をよしとするか否かの学問感の相違である。宣長は麗女とは学問的交流を求めていると思量されるが、逆に麗女は根拠なく誹謗中傷されていると感じており、それゆえの感情の行き違いを指摘した。

第二章では、宣長の擬古物語『手枕』を通して、宣長が『源氏物語』を範として擬古物語を執筆していることと、『源氏物語』に近づける方針で『手枕』が修訂されていることを指摘し、麗女に同様の指示する傾向があり、それが両者の『源氏物語』利用への考え方の違いに論争の根本的な原因があったのではないかと論じている。

第四部「麗女と漢学者」においては、麗女と交友を持った漢学者野村東皐と、頼春水について考察している。

第一章では、今まで整理されてこなかった野村東皐の事跡を追って、特に『読国意考』の検討から東皐の和学への態度を解明した。東皐は、真淵が漢学を排除する態度を取っていることを批判している一方で、他の思想を介さず日本の古典をそのまま理解すべきという真淵の思想と真淵自身の実力を認めていた。『読国意考』は先行研究で護国学の立場から国学を裁く論とされてきたが、その誤りを指摘し、東皐は漢学者であるが和学に関心を持ち、麗女に漢学と和学の両立の可能性を探っていたのではないかと結論づけている。

第二章では、麗女の紀行文『初午の日記』に寄せた頼春水の序文の検討から、麗女及び『初午の日記』への賛辞と、家雅と春水が書簡をやり取りして序文執筆に至ったという経緯を読み取っている。文中に吉野への旅が書かれるが、春水の随筆『在津紀事』にもほぼ一致する記事があり、『初午の日記』春水序文と比較することで、麗女が春水に序文を依頼した時期を安永七年三月末以降同年内であることを示した。

以上を総合して、論者は、近世和文の中で麗女を位置づけている。論者によれば麗女を『源氏物語』以後連綿と続く女流文学の系譜に並べる見方、もしくは近世和文を雅俗の対立軸でみた場合の「雅」に属し、その中で真淵門、宣長門のどちらにも属さない第三派に位置付ける見方が可能である。しかしながら、従来はそれらの立場からも麗女が位置づけられることはなかった。またその作品も擬古物語や歴史物語の内実が問われたこともない。

その二つの視点をつなげるには、「和学に精通した漢学者」あるいは「漢学に精通した和学者」として要素を積極的に評価したうえで、麗女の文学史上の位置づけを得ることが必要である。漢学の素養を以て和文をなす女性は、『源氏物語』作者紫式部を代表として多く存在していると思われるが、国学隆盛の近世期だけを取り出してみればその要素およびそこから得られる知見が抜け落ちてしまうとする論者の主張は一定の説得力を有するものと思われる。国学の影響下でない儒学者の和文に麗女の和文を並べ、麗女を「漢学をよくする者の和文」とする結論から、新たな荒木田麗女研究の視座が開けると期待させるものである。

### 【審査結果】

審査委員会はコロナ禍の状況のため遠隔（メールやネットワーク利用）で開催された。

第1回審査委員会では本学の規定するところの経歴と業績の申請者に於ける該当が議論された。経歴は履歴書における記載ミス、虚偽申告をチェックし、問題なしとの結論を得た。業績は外部の学問的に重きをおかれる査読論文の有無および総体の論文数も確認できた。

第2回審査委員会は各委員が査読結果を持ち寄り、意見交換と公開審査における質疑について議した。おもな議題を上記論文の構成に従って順次試問することに決した。おもな争点と質疑は以下の通りである。

第1部では、『建礼門院右京太夫集』の扱いが問題となった。麗女が『建礼門院右京太夫集』を利用したとの指摘は説得あるが、その流布状況や読みに問題があるのではないかと。また、序文・跋文の読み、特に仮託の問題、武家・公家と「公」権力における「公」の問題、伊勢における皇位正閏との関係、「漢学者」の定義などについての質疑があった。第2部では栗栖野の解釈、藤堂サロン、石水博物館蔵本、中国古典を利用した意図について質疑があった。第3部では『麗女難陳』の批評者についての議論、津藩儒奥田三角との関係における当代儒学者との関係の確認、そもそも文学史上や歴史物語作者についての荒木田麗女の位置づけを問うものがあった。

これらの質疑に対して、申請者による応答があった。おおむねその読みや作業の甘さを認めながらも現段階での知識や作業に伴う見解が示され、また論文本体には盛り込めなかった課題についての今後の深化への見通しが示された。

上記の質疑応答を経て第3回審査委員会が開催された。

審議の結果、以下の結論が得られた。

荒木田麗女は、その姓が示すように、新たに伊勢に住しながら、着実に権勢を有するにいたった伊勢神宮外宮御師であり、叔父である荒木田家を継いでいるが、実父は伊勢神宮内宮権禰宜家の武遠である。また嫁した慶徳（慶滋）家雅家も御師の家であり、伊勢神宮周辺における学問の伝統を直接に受けたと思量される。そのため彼女の創作環境は周囲に備わる古典に恵まれたと捉えがちである。また伊勢や松坂には本居宣長、久老などの有力な国学者、奥田三角などの漢学者がいたこと、周辺には谷川士清や崎門学者も多くいたことが、彼女の漢詩や歴史物語の制作に有利に働いていたと見られがちである。事実、豊宮崎の連歌のリーダーであり、紀行文も創作している。



さらに、麗女は近世期には珍しい女流作家であったことの研究は女性作家であることが加わって、その面が強調された時代が長く、正しい麗女像および作品論が結ばなかった。また、宣長との論争がひととき注目されてきた。その観点からなされた従来の研究は誤りではないけれども、そのために見落とししてきたものも多い。漢学者との関わり、なにゆえに麗女の擬古物語の序文を漢学者が書くのか、といった問題は其の最たるものであって、そこに注目したところに本論文の意義がある。また、擬古物語、歴史物語の内実の解明に挑んだところも評価したい。歴史物語について、「史実と認定し得る漢文史料や記録及び既存の歴史書や歴史・当該時代を知ることのできる物語類」をもとに、新たな物語を生成するという指摘は妥当なものである。

物語そのものの価値や、創作方法など新しい視点を提示し、宣長との論争についても、宣長側の理解不足も指摘した上で、擬古物語に対する理解・創作態度が最初から異なっていることの指摘は重要である。

また、女流文学の系譜と、近世和文の「雅」の真淵門、宣長門の両者に属さない第三系に据える視点の葛藤を「和学に精通した漢学者」あるいは「漢学に精通した和学者」として融合させた本論の立脚点は成功していると思われる。

もちろん、序文・跋文を含めたテキストの「読み」の問題で気になる点が少なからずある。「文学性は歴史物語の価値を損なわない。むしろ、事実そのものの記録よりも歴史伝達の方法として優れるという見方もできる。そこに、麗女の歴史物語の存在価値がある」という結論は歴史と文学、主観と客観、ひいては歴史とは何を叙述するのか、その延長に「何」を「どのように」記述したがゆえに歴史書／歴史文学の差異があるのか根本的な問題も未解決である。調査の必要な資料の指摘もあった。その再考も含めて申請者の今後に期待したい。

以上